

替え歌という難題

勅使河原美知子

△調査▽

二年 新宿区立四谷第一小学校

25 名

三年 町田市立町田第三小学校

36 名

四年 世田谷区立玉川小学校

33 名

五年 世田谷区立玉川小学校

35 名

〃 横浜市立汲沢小学校

42 名

六年 横浜市立三沢小学校

38 名

△調査に使用したものと歌▽

静かな湖畔

静かな湖畔の森のかげから

もう起きちゃいかごとカッコーが

鳴く

カッコーカッコー カッコーカッコー

カッコー

結果的には、私の整理担当した「替え歌」からは、資料的価値を持つ程のものが、あらわれてくれなかった。但し、附随的にはあるが、かなり重要な問題点と思われることを考えさせられたので、この方を主として、まとめてみた。

わたしたちは、本号のテーマである「子どものことばを操る意識」を探る為に、その問題点や、その調査方法等

について、何回かの研究会を行った。この「替え歌」が、その恰好の対象に擬せられたことは、本会ならずとも、日常生活に於ける言語操作を特別に意識する具体的な会であり、事例であると誰しも思うところであろうから、この段階までの運びに特別の齟齬があったとは思えない。だが調査結果からは手続、方法、よりも以前に「替え歌」によって、その方面での子どもたちの能力を見届けようとした。いわば、常識的判断の甘さがあったように反省する。その根本的なことの一つに「替え歌」ということが、子どもたちにとって、概念的にはわかっていても、実際的には未経験であることが、調査以前に問われて然るべきこととして挙げられる。われわれは、このことを軽視というよりも、われわれ自身のこの陥穽に落ち込んでいた。後に引用する二、三の例からも、二年生すら充分に「替え歌」ということを知っている。この知っているということ、われわれが調査に踏み切ったことに対してそう思うのである。つまり、知るということは、この場合、受動的な知識であり、替え歌するということの、能力とは、直接的には分離させて考えねばならない。しかも、替え歌をするルールを新しく設けて、それに従わせるのではなくて、子どもたちの銘々の「知ってい

る」という理解に基かしめれば、出て来る替え歌が「知っている」ことの証明の為にのみ奉仕させられることを、われわれはどうして予め気が付かなかったであろうか。

かくして得られた資料は、利用することは出来る。しかし、本号で取り上げようとすることばを操る意識とは遠くなっている。ことばを操る意識が、替え歌によって覗えるとしたわれわれの見解はどうであつたのであろう。替え歌が、もと歌からの離脱であつたら、もと歌の完全消失であつてはならない矛盾をはらんだまま、替えるという印象は成立する。動きとして把えるならば、もと歌の動きと完全同一からは離れて、同傾向、同種類、類似、反対、対照、等々への移りであり、変化でなければならぬ。その移り、変化は、もと歌と替え歌との関係の中で成立するのはいうまでもないが、この関係をどう関係づけるかによって、替え歌の評価とするといつてよいだろう。

一 もと歌の字句の変更
二 もと歌の世界の変更

右の二大別が原則的に考えられる。勿論、両者は、それぞれを目的として結果的には他者と混合する。たとえば、字句変更を思いついて、全体的には、世界を変更せしめていたというようなことである。この逆もまたあり得る。

司の一箇所に停まつただけということ

(二年男)

すてきな。あーつい。すっか

り。だんだん。

※ 二年と同上

※ 二年のとってもしずかなが、

順調とすれば、これは逆強

調。

学年の発達に比して、それほど、もとの初句が、様々に替えられるということではない。語彙の増加によって、それが能力的にむずかしいということではおそらくあるまい。初句を替える興味よりも、別の関心があつたとすべきである。右の例以外は、もとの「静かな」を踏襲しているのは三年生までで、それ以上は、形容動詞、形容詞、副詞にこだわらなく、名詞、代名詞、動詞で、平然と始められている。この変則の甚しいのは、四年生で、そのため語調すらも整っていないのが多い。しかしそれだけに、一体何を替えようとしたのかを考えさせるのである。つまり、逆に言えば、この子らの替え歌は、原型を最小の限界にまで押しやうて、変更の部分を最大にしようとしていることになる。

。勉強しても、たいくつで困る

そおーっとぬけたが、つかまった

ごめーん 〈ごめーんなさい

(四年 男子)

。時計は一時、二時あるけれど

ぼくの時計は 三時だけ

チクタク グー 〈 〈

(四年 男子)
。ユネスコ村へ えんそくに行つて
矢野君 よつて苦しむよ

おえー 〈 〈 〈 ゲエ

(四年 男子)

結局、これらが原型として残したのは、最後に擬声語でまとめるということだけであろう。しかし、それだけにこの傾向を持つ子どもたちは、奇想天外さを盛り込みたさでいっばいなのであろう。内容(題材)は身近な生活経験を採用している。五年生では、型の上での変則さは、やゝすなおになるが、内容(題材)は、社会的事象や性的関心を示すものを歌おうとする。

。大きな日本の川崎近く

けむりや公害で せきが出る

ゴホン 〈 〈 〈 〈

(五年 男子)

。きたないアパートに住む人たちは

ゴキウリやハエに困つて

フンフン 〈 〈 〈 〈

(五年 男子)

替え歌を作る意識が、競作するという条件を伴いがちであるためなのであろう。内容(題材)本位になって新奇さを競い、原型の形式を忘れる。それも、二、三年では、それを忘れる程、発想が自由ではない。大体四年生をピークにして、再び、原型の形式の利用に戻るように思われる。強いて言えば、

何をどう替えるかが、何をどう残すかに移って来ている。

◎何をどう残そうとするか

。おとうさんの鼻から鼻毛が出たよ

鼻毛を切れと子ども言う

チョキ 〈 〈 〈 〈

(六年 男)

。静かな静かな町のおくから

戦車をおさないと反たいは

わあっしょい 〈 〈 〈 〈

(六年 男子)

もと歌の語句よりも、文型に着目しているということである。「の、から」「とと(が)」で結びの擬音、擬声に至るという形式をつけている。もちろん、もと歌の内容(題材)とは全く無関係のものを選んでのことである。

以上、大体の発達の経路と思われることをまとめてみたが、内容(題材)と形式とを、ここに述べた六年生ほどに無いにしろ、みごとに整えた特例が二年生にあったことも、附け加えておく。

。ちいさなとりごやの中のほうから

やきとりにしないでと なくにな

とり

ケッコー 〈 〈 〈 〈

(二年 女子)

擬声語まで洒落ることが出来るのは、特殊才能であろうか。



(東京・四谷一小・教諭)